日本における男性の同一性形成の諸タイプについて

石　谷　真　一

On the Types of Identity Formation in Men in Japan

ISHITANI　Shinichi

I　問題および目的

(1)　同一性の実証的研究における問題点

Erikson, E.H.（1950, 59）は，生涯にわたる人格の発達と展開の様相を，個体発達分化の図式 epigenetic chart として表現したが，その5番めの発達上の危機として同一性対同一性拡散を挙げている。これは大人としての永続的な同一性を確立する主体的な試みが，青年期の終わりに頂点に達し，対局にある同一性の拡散状態も顕著となることを示している。実証的に同一性形成過程を究明しようとする研究も，もっぱらこの時期にあたる大学生を対象としているが，測定のための最も有効な枠組みは，Marcia, J.E.（1966）により考案された自我同一性地位面接法とされている。

これは半ば構造化された面接によって，職業，価値観（あるいは宗教），他に政治や性役割などの領域で，危機，すなわち自分の態度を選択・決定する際にいくつかの可能性について迷った重大な転換点と，傾倒，すなわち自ら選んだものへの積極的な関与，の二点についてその有無を問うものである。そしてこの二基準の有無の組合せによって，四つの地位 status のいずれかに被検者を評定する。危機を経験したうえで現在何ものかに傾倒している同一性達成，現在傾倒できるものを模索しており危機の最中にあるモラトリアム，現在傾倒するものはあるがそれをめぐっての危機は経験していない早期完了 Foreclosure，そして現在傾倒できるものをもたないがモラトリアムのように模索することもない同一性拡散，の四つである。

この枠組みを用いた欧米の研究では，同一性地位を類型的観点からとらえ，同一性地位と認知やパーソナリティの特性，行動などの測度との関連を検討したものが多く，高橋（1984）が概観しているように，男性の場合には，達成とモラトリアムの二地位と残る二地位との間に有意差の見られることが多い。ただ女性を対象とした研究では男性ほど一様な結果は見られず，女性の同一性形成は親密性の危機とも関連づけて究明する必要性が指摘されている。また同一性地位の経年的な変異をめぐる問題，特に成人期の同一性地位をめぐる問題は岡本（1985A，B　1986）の先駆的な研究をのぞいてはまだほとんど手が付けられていない。さらに第三の問題点は同一性形成の文化差，すなわち日本における同一性形成の特異性の問題である。

自我同一性地位面接法を日本に導入した無藤（1979）の研究では，早期完了地位に評定される

者の全体に占める割合が，Marcia らの研究結果に比べてかなり多く，またその臨床像も Marcia (1966) が挙げた「パーソナリティのある種の硬さ」や「脆さ」はうかがわれず，「今後も要領よく生きていくだろう」といった印象を与えるものであった。早期完了地位は，その原語 Foreclosure の邦訳そのものから諸説があったように，他の地位に比べ，その人格発達上の意味合いが日本においてはあいまいである。このような問題が生じてくるのも，Marcia の自我同一性地位面接法ではすくい取れない日本的特徴があるからではなかろうか。この点を明らかにしていくには，同一性形成の様相に関する，新たな測定のための枠組みが必要となると考えられる。本論はこの第三の問題点を主に取り上げ，日本における同一性形成の諸類型を把握できる実証的枠組みを模索することを目的とする。

ところで本研究は男性を対象としていることをここで断っておきたい。同一性形成における性差は前述したように重要な研究課題であるが，性差の問題まで取り扱うのは本論の枠組みを越えると考えたからである。そこでまず，同一性の日本的特徴についての文献的考察を概観し，続いてそれらに関する実証的研究を見ることにする。

(2) 同一性の日本的特徴に関する論考の概観

山本・名島 (1984) は，日本文化における同一性の吟味の必要性について，「たとえば自我同一性という言葉一つを取り上げてみても，その意味内容は欧米と日本では同じものであろうか」と問題を提議し，「同一性が個人の自律的意志を前提とした社会での，心理－社会－歴史にまたがる自我形成の問題であることを考慮すれば，同一性概念の導入にあたっては日本社会における自我の在り方，日本人の人格構造，日本特有の文化的価値体系といったものを綿密に検討する必要性がでてこよう」と述べている。同一性形成における日本的特徴についての論考は，鑪 (1974, 77) の「集団的自我への埋没」や「受動的自我の自律性」，木村 (1972) の「血縁史的アイデンティティ」，さらには河合 (1976) の「深いアイデンティティ」などに見られる。以下にこれらの論考を概観するなかで，日本における同一性形成の特徴を検討する。

① 鑪の「集団的自我への埋没」

鑪 (1974) は，同一性形成が最も問題となる青年期になっても，日本においては，心理的な意味で保護的なもの，母的なものからの分離が不明確なままになりがちであり，またこの時期は新たな集団への所属が問題となる時期でもあることから，各個人はその自我境界を取り外し，「集団的自我」とも呼べるような集団的雰囲気に取り入れられるのが，日本の心理社会的パターンであると述べる。つまり自我拡散の不安から孤立へ向かうよりも，積極的に自己を放棄して集団的雰囲気の中に入り込もうとする機制が働くと鑪は見る。しかも「集団的自我」とは，それ自身，定義や境界の明確なものではなく，権威的人物像を中心に成り立っている流動的で，雰囲気とでも言うしかないものであるが，所属する個人の思考や行動を画一化していくほどの力も持っている。さらに鑪 (1977) は，日本においては発達の早期から，外界に対して自分がいかに適応するかの能力，つまり外界に対する敏感さを養う面に力が注がれるとし，「集団的自我」への埋没の機制は人格発達のなかでも準備されていると考えている。鑪の観点に従えば，先程の早期完了地位は，「集団的自我」への所属と埋没によって自我拡散の不安を防衛する在り方と考えられる。これに対し，木村や河合は，同じ現象を異なる観点から見ている。

② 木村の「血縁史的アイデンティティ」

木村（1972）は独自の精神病理学的視点から，「人と人との間」には「超個人レベルのアイデンティティ」が存在し，それは「一人一人の個人のアイデンティティとか，それの集合としての集団的アイデンティティではなくて，各々の個人がそこから生まれてくるような，個人以前のなにものかに関するアイデンティティ」であり，これを歴史的な視点から見れば，「血縁史的アイデンティティ」とでも呼ぶものとなる，としている。もう少し詳しく規定するなら「人と人との間の自己実現の仕方の同一性」，「日本人的な「生き方」の同一性」とも言える。「超個人レベルのアイデンティティ」とは，個人が意識するしないに関わらず，また望む望まないに関わらず，すでに個人を包んで存在している同一性なのである。木村の論考は，鑪の「集団的自我」をさらにつっこんで分析したものといえるが，多分に無意識的な同一性を我々が共有していることを示唆している。

③ 河合の「深いアイデンティティ」

河合（1983）は，アイデンティティをJung, C.G. の自我と自己の軸上（自我は意識の，自己は無意識の，あるいは意識も含めた人格全体の中心とJungは考えた）にあるものとし，アイデンティティを自我の側に引き付けて考えると，アイデンティティの確立は自我の確立，つまり意識的・自覚的な自己像の形成を中心とした自我の統合となり，一方アイデンティティを自己の側に引き付けて考えてみるならば，「その個人は自分の真の自己ということをどれほど認識しているかとか，自分の自我を根付かせるためにどのような象徴を把握しているかとか，そんなことが問題となる」。先の木村の超個人レベルのアイデンティティとは，より自己の側に近いアイデンティティと言え，河合はこれを「深いアイデンティティ」と呼んでいる。そして日本において同一性を考える際には，この「深いアイデンティティ」の側面も考慮に入れねばならず，自我の確立といった同一性の側面で，曖昧さを多く含むからといって，人格全体が統合性や安定性を欠いているとは，簡単には言えないとしている。

このように同一性の日本的特徴についての論考は，集合的・超個人的・無意識的な同一性に関するものが中心である。このような同一性を，とりあえず鑪の表現を借りて，集団的自我と呼ぶことにする（鑪の述べる「集団的自我」は括弧で示す）。

一方，日本における個人的な自我同一性形成を，これらの論考はどう見ているのだろうか。鑪（1974）は，個人的な同一性形成は，「集団的自我」への所属と埋没だけでは生涯を終えることのできない者だけに問題となり，また個性的な自我は「集団的自我」により排除されるか，あるいは逆に取り込まれるなかで，「集団的自我」に吸収・消滅する危険にさらされると見る。また河合（1978）は，対人恐怖症のメカニズムを分析するなかで，日本における自我形成に特有な問題点を指摘している。河合は対人恐怖症の本質を，西洋的な自我確立への強い要求を意識下に持ちながら，それを自覚できず，他方で日本的な「場の救い」をあてにする依存性を断ち切れないジレンマと見る。しかし河合はこのジレンマを，対人恐怖症を越えて，日本において個人的な自我形成を歩む者が直面しなければならない普遍のテーマとしてもとらえている。換言すれば，日本において個人的な同一性を形成していくには，集団的自我への取り込まれと埋没に抗することが，個々人の意識の次元で必要となると言えるだろう。

鑪も河合も，集団的自我と個人的な自我形成との関連において，日本における同一性形成をとらえていると言えるだろう。そこでこれらの論考をふまえ，以下の3点から実証研究を概観する。

① 集団的自我とは，鑪の言うように，青年期だけでなく成人期においても一般的なものなのだろうか。

② 河合の言うような人格全体の安定性から見たとき，集団的自我のなかで生きる者はどう評価できるのか。

③ 個人的な自我同一性形成と集団的自我とはいかなる関連をもつのであろうか。

(3) 集団的自我との関連で見た，同一性形成に関する実証的研究の概観

①に関して，岡本（1985a，85b，86）は中年期あるいは定年退職期の同一性について，自我同一性の枠組みでとらえ，この二つの時期は，青年期後期と並んで，同一性の危機と同一性の再体制化が生じやすい時期であることを明らかにした。しかしこれらの時期においても，深刻な危機の自覚や変化に伴う不安定感をそれほどもたず，「比較的徐々に」あるいは「それほど苦労なく」この時期を過ぎていく者もかなりいることが示された。これらの者の中には，「人生の危機や節目の意識をほとんどもたず，自我同一性の問題は棚上げにして生涯を過ごす人が多いと思われる」と岡本は述べている。岡本の研究は，成人期においても集団的自我に埋没したまま，個人的な自我の同一性がさほど問題にならない者もいることを示唆していると考えられる。

②の問題意識で，杉原（1985）は早期完了型の青年の個性記述的研究を行っている。その結果，イデオロギーが非常に漠然としてあいまいである点を，Marcia の早期完了型と最も異なる点として挙げ，それでいて拡散状態に陥らないことは，「より無意識的なもの」によって自我が支えられているからではないかと，前述した河合の論考をもとに考察している。しかしこのようなあいまいな自我の状態は，一応の安定を得てはいるものの，自我拡散に対する不安をもたらしてもいることを杉原は指摘している。青年期には，日本においてもなんらかの個人的な自我形成はやはり必要であり，集団的自我に支えられただけの在り方は，人格の統合上もかなりの脆さを抱え込むことになると考えられる。それでは日本においても必要と考えられる個人的な自我形成は，集団的自我との間にどんな問題を生むのだろうか。

③について，森（1989）は同一性形成における日米差の比較研究のなかで，日本では個人的な同一性を確立するには，同調を期待する社会的圧力を克服・拒否する必要があるととらえている，と述べている。これは鑪や河合の論考を支持している。また木村（1983）は，対人恐怖についての TAT を用いた研究で，対人恐怖心性の高い者に，自我拡散のタイプと，「自我確立の途上で集団に対して宙ぶらりんになっているタイプ」が混在していると推測しているが，同一性の危機も，集団的自我との内面的葛藤という形で顕在化し易いのではなかろうか。

先の木村（1983）の研究では，対人恐怖心性の低い者に，「自分が確立されたあとに，集団ともバランスを取りながら，いわば和して同ぜず生きていくタイプ」（調和型）と，「鑪のいう集団的自我への埋没状態で，自我の輪郭があいまいなまま不安なく適応しているタイプ」（埋没型）とがいるのではと考えている。「調和型」のように，個人的な自我確立と集団的自我への所属は必ずしも相反するものではないのかもしれない。

以上，先行研究の検討より，日本における同一性形成は，個人的な自我同一性形成と集団的自

我との２点からとらえるのが，最も現象に即した有効な枠組みと考えられる。しかしこの２点から同一性形成の特徴をとらえ，同一性の様相を類型化する測定法は未だ確立されていない。そこで本研究では独自に同一性質問紙を作成することにした。前述したように本研究では対象を男性に限定するが，青年期後期から成人期の男性を対象とすることで，岡本の研究（1985a，85b，86）以外にはほとんど扱われていない，成人期の同一性の様相についても見てみたい。

Ⅱ 方　　法

(1) 被検者

男子大学生１５７名，社会人男性１０５名。社会人は全て教員（小・中・高・大学の教員）である。年齢別の人数を表１に示す。

(2) 測定用具

① 同一性に関する自己意識質問紙（以下，同一性質問紙と略記）

本研究では同一性に関連した主観的な自己意識を測定したい。こうした問題意識で質問紙を作成しているものに，Dignan，M.H.（1965）の自我同一性質問紙がある。これは同一性の主観的側面を，自己感覚・独自性・自己受容・対人的役割期待・安定性・目的指向性・対人関係，の７次元からとらえようとするものである（表２参照）が，Dignan はこれらの次元に対応する下位尺度を設けた形での質問紙は作成してはいない。千原（1988）は，対人的役割期待と対人関係を除く５次元を用い，Dignan の定義に基づいて項目を収拾し質問紙を作成している。その結果，自己感覚と独自性，自己受容，目的指向性の３次元から同一性はとらえられた。そこで本研究では，千原の結果を考慮して，４次元・４下位尺度からなる同一性質問紙を作成した。４下位尺度

表１

年齢群	G1	G2	G3	計
年　齢	19～24	25～44	45～62	
人　数	149	55	58	262

表２

自我同一性の次元	定　　義
自己感覚	自己の連続性ならびに自分が何者であるかがわかる。
独自性	自己の個性あるいは他者との相違の認識。
自己受容	ありのままの自分を受け入れそうした自己とともに歩む。
対人的役割期待	他者が自己に期待しているさまざまな役割を混乱なく統合し，確信がもてる。
安定性	自分についての感じ方が大きく変わることなく安定している。
目的指向性	将来の自己像が把握でき，自分が目指し向かおうとする方向がわかる。
対人関係	他者と親密かつ自然な関係をもつ

（「自我同一性研究の展望」鑪他 よりの引用）

は以下の通りである。

(a) 自己感覚　Sense of Self（以下，SS 尺度）

他者との安定した境界のうえに成り立つ自己存在感で，個人として，基本的な同一性を維持していることを示し，この感覚の欠如は自我の拡散感を意味する。Dignan の自己感覚と独自性の定義を合わせたものである。

(b) 自己受容　Self-Acceptance（以下，SA 尺度）

Dignan の自己受容の定義どおり。自己に対しての肯定感を表し，同一性の達成を傍証するものといえる。

(c) 自己依拠性　Self-Orientedness（以下，SO 尺度）

個人的で独自な自我内容（以下これを，個我と呼ぶ）の形成・確立を主観的側面からとらえたもの。本論における個人的な自我同一性の側面である。

(d) 所属欲求の克服　Sense of Belonging（以下，ＳＢ尺度）

本論における集団的自我への関わりの在り方をとらえるもので，高得点は集団的自我への埋没に抗する意識的態度を，低得点は集団的自我への所属と埋没を望む態度を示している。

項目は上の定義に基づき筆者が収拾し（表３参照），７段階，自己評定で実施した。

② TAT（Thematic Apperception Test）

Murray 版のカード２，３ BM，４の３枚を用いた。質問紙と同時に実施し，白紙に物語を書き込んでもらった。

Ⅲ 仮　　説

(1) 日本における同一性形成は，個人的な自我同一性形成と集団的自我（集合的・超個人的・無意識的な文化的同一性）との関連において，その特徴をとらえることができるだろう。具体的には以下の特徴が見いだせるであろう。

① 個人的な自我同一性形成は，集団的自我への所属や埋没に抗して進行する。

② 同一性の危機は，個人の意識においては，個我の形成と集団的自我との間の葛藤・軋轢という形で，顕在化しやすい。

③ 個我の形成の不全・失敗は，すぐに自我拡散に陥るのではなく，集団的自我への埋没という形で防衛される。

④ 日本における同一性の達成の在り方として，個我と集団的自我との調和という在り方もあるだろう。

(2) ①～④の特徴を典型的に示すタイプも見出だせ，同一性の様相を類型化することが可能だろう。

Ⅳ 結　　果

(1) 同一性質問紙の下位尺度の相関について

表3　同一性質問紙の項目の因子分析

		FAC1	FAC2	FAC3	FAC4	
SS*	時々，私は自分がどんな人間なのかあやふやになる	.654	.028	.070	.266	SS1
SS*	どれが人の考えでどれが自分の考えかわからなくなることが多い	.530	.285	.251	−.222	SS2
SS*	どんどん相手に引き込まれて自分が消えていくような気がすることがある	.545	.395	.211	−.025	SS3
SS*	時々，私は自分がどんな人間なのかわからなくなることがある	.794	.111	.109	.192	SS4
SS*	知らず知らずのうちに相手に引き込まれていくような気がすることがある	.491	.369	.266	−.029	SS5
SS*	ちょっとしたことで自分を失い混乱する	.606	.228	.153	.113	SS6
SS*	本当は自分がどんな人間なのかがわからない	.767	−.009	.106	.166	SS7
SS*	自分の気持ちや考えがそのときどきで変わり，混乱することがある	.726	.224	.066	.061	SS8
SS*	まわりに呑み込まれて自分が無くなっていくような気がすることがある	.514	.249	.264	.122	SS9
SS*	自分で自分のことがわからなくなることがある	.809	−.083	.076	.221	SS10
SS*	どこまでが自分でどこからが人になるのかわからないような気がすることがある	.667	.198	.215	−.016	SS11
SS*	自分が何者であるかがわからない	.720	−.124	.171	.102	SS12
SS*	突然考えや気持ちが変わったりして，自分が非常に不安定になることがある	.736	.246	−.033	.104	SS13
SS*	自分がバラバラでまとまりがないように感じる	.798	.128	.169	.048	SS14
SA	私は完全な人間ではないが自分のことが好きだ	.390	.081	.097	.590	SA1
SA	私には欠点もあるがそれ相応の自信を持っている	.305	−.047	.378	.224	
SA*	時々，誰よりも自分がいやな人間に思える	.530	.083	−.026	.384	SS15
SA	私には欠点もあるが今のままで良いと思う	.190	.192	−.086	.717	SA2
SA	今の自分に満足している	.408	.013	−.017	.735	SA3
SA*	どこかに自分はダメだという気持ちがある	.522	.161	.091	.337	SS16
SA*	時々，自分の何もかもが嫌になる	.720	.052	−.098	.247	SS17
SA	自分には欠点もあるがだからといって無理をしなくてもよいと思う	.030	.179	−.014	.383	
SA*	今の自分は嫌いだ	.630	−.034	.136	.523	
SA	自分には長所もあるし短所もあるが，全体としてこれで良いと思う	.214	.165	.067	.716	SA4
SA*	今の自分をころっと変えてしまいたい	.576	.046	.040	.388	SS18
SA	完全ではないがありのままの自分で良いと思う	.082	.047	.129	.517	SA5
SA*	自分にあまり自信がない	.605	.138	.118	.388	SS19
SO	私は自分の人生がどう展開していくのかについて見通しを持っている	.202	−.167	.242	.388	
SO	とにかく自分の考えや信念を一番尊重する	−.104	.191	.570	.023	SO1
SO	私は自分の拠り所となるような将来の目標を持っている	.346	−.080	.530	.288	SO2
SO	自分の人生は自分の意志で切り開いていくものだと思う	.078	−.096	.506	−.203	SO3
SO	自分の生き方というものがはっきりある	.302	.004	.654	.310	SO4
SO	周囲の人々の考えと相入れなかっても自分の考えを尊重する	−.062	.291	.529	.098	SO5
SO	自分が進んでいこうとしている方向がはっきりしている	.328	−.028	.591	.434	SO6
SO	他人にわずらわされず自分の道を生きていると思う	.274	.240	.500	.311	SO7
SO	自分が何をめざしているのかはっきりしている	.308	−.104	.649	.350	SO8
SO	大切なことでも自分の考えで判断し決定する	.058	.217	.556	−.033	SO9
SO	自分の夢や理想を実現することが何より大切だ	−.109	−.143	.601	−.079	SO10
SO	他人の評価を気にせず，自分の信念や価値観に基づいて行動する	.198	.411	.510	.189	SO11
SO	自分なりの信念や価値観をはっきり持っている	.350	.135	.666	.040	SO12
SO	自分の将来は自分の力で切り開いていくものだと思う	.055	−.023	.626	−.237	SO13
SO	自分が何を求め何をしたいのかはっきりしている	.359	.046	.715	.164	SO14
SB*	周囲の人々の思惑や期待に答えることが私の行為規準だ	−.002	.498	.064	−.008	SB1
SB*	仲間や周囲の人との和を一番に重んじる	−.062	.641	.112	.051	SB2
SB*	仲間や周囲の人から認められることが一番の目標だ	.180	.643	−.104	.099	SB3
SB*	仲間や場から浮き上がるようなことは避ける	−.044	.414	.245	.140	
SB*	仲間や場から疎外されることを最も恐れる	.222	.731	.088	.214	SB4
SB*	仲間や集団から離れた自分は考えられない	.005	.637	.152	−.023	SB5
SB*	仲間や場からの承認が何より心強い	.123	.683	−.095	.018	SB6
SB*	仲間や場の期待や思惑に合致するよう行動する	.144	.707	.121	.033	SB7
SB*	一番恐れることは，場や集団から孤立してしまうことだ	.174	.779	.033	.176	SB8
SB*	何より仲間や集団の一員になれるよう努力する	.109	.841	.034	.060	SB9
SB*	仲間や場から受け入れられることを最も望む	.088	.848	−.102	.008	SB10
SB*	仲間や場にしっかり所属できることが一番大切だ	.112	.774	.004	−.063	SB11
SB*	仲間や場の支えなしには生きていけない	.281	.595	.032	.132	SB12
SB*	仲間や場の雰囲気にとけこむことが何より大切だ	.034	.766	−.047	.122	SB13
SB*	集団や場に所属できれば安心だ	.114	.632	.052	.009	SB14

（*は，逆転項目）

各項目について１点から７点を与えて相関行列を算出し，因子分析（主因子法・バリマックス回転）により，４因子を抽出し表３のような結果を得た。因子負荷量が0.45に満たない項目を削除したところ，第１因子にはSS尺度にSA尺度の逆転項目を加えたものが現われた。また第２因子にはSB尺度，第３因子にはSO尺度が対応し，第４因子にはSA尺度の残りが現われた。項目の意味を検討したうえで，第１因子にのった項目を新たにSS尺度とし，第４因子の項目をSA尺度とした。逆転項目が抜けた新たなSA尺度は，単なる自己受容を越えた積極的な自己肯定感といった面が強まった。SB，SO尺度については最初の定義どおり解釈して良いと考えた。次に各下位尺度ごとにGP分析を行ったが，全項目に0.1％水準で有意差が見られ，全項目を弁別力のあるものとして以下の分析に用いた。

つづいて，各下位尺度の合計点と４下位尺度の合計点（同一性総合点，IDTと略記）を被検者ごとに算出し，ピアソンの相関係数を出した。また被検者を表１のように，年齢によって３群に分け，それぞれの年齢群でも相関係数を出した。全体では，４下位尺度は相互に正の相関を示したが，各年齢群での相関関係を見ると，SB尺度を除いた下位尺度間には各年齢群を通してほぼ一様に，0.1％水準で正の相関があったのに対して，SB尺度と他の下位尺度との相関の在り方は，各年齢群で少しずつ異なっていた。G1では，SB尺度はSS尺度との間に0.1％水準で，SA尺度との間には５％水準で正の相関が見られたが，G2ではSB尺度はSS尺度との間にのみ有意な正の相関（５％水準）を示し，G3では有意な相関は全くなかった。年齢が上がるに従い，SB尺度と他の下位尺度との相関は消える傾向にあった。またどの年齢群でも，SB尺度とSO尺度との間には相関が見られなかった。

G1で，SB尺度がSS尺度と高い正の相関を示したことは，個人としての自己の感覚が強まる方向と，集団的自我への埋没に抗する在り方とが関連しており，言い換えれば，集団的自我への埋没の方向は自我の拡散感と関連していることを意味している。この結果は，集団的自我への埋没は自我の拡散に対する防衛ともなるという，仮説(1)－③を支持するものと考えられる。しかしSB尺度はSO尺度とは相関がなかったので，仮説(1)－①は支持されなかった。また青年期後期にあたるG1でのみ，上記の点が支持され，成人期では，個人的な同一性と集団的自我との関連は，相関関係からは明らかにできなかった。

(2) 同一性の下位尺度得点の年齢群間での比較

次に年齢群間で，下位尺度得点と総合点を比較し，分散分析を行った（図１）。有意差の現われたのは，SS尺度とSA尺度，それに総合点で，いずれもG2，G3の成人期の群で高い得点を示した。青年期後期の者に比べ，成人期の者のほうが，個人としての自己感覚や自己肯定感が高かったが，個我の形成や集団的自我との関係の面では，差は見られなかった。

(3) 同一性の様相の類型化

同一性の様相を，個我の形成と集団的自我との関係から類型に分けてとらえることにした。SO，SB尺度の得点により，全被検者を高得点群と低得点群とに二分し，２下位尺度を組合せて，2^2＝４つのタイプのいずれかに被検者を分類した。それぞれのタイプの分類基準と，下位尺度得点の特徴（図２）から得られた臨床像は以下のとおりである。

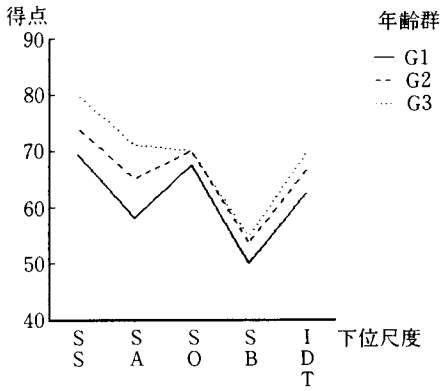

図1　年齢群別の下位尺度得点

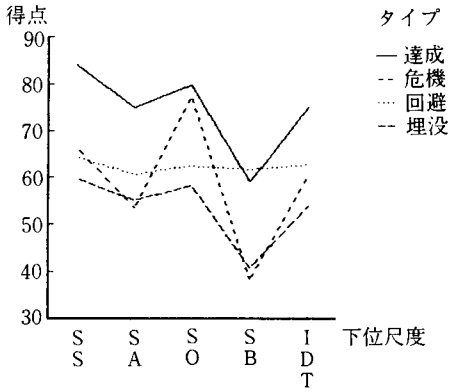

図2　各タイプの下位尺度得点
（分散分析による比較）

① 「達成」タイプ

SO，SB 尺度得点がともに高い者。タイプ間での下位尺度得点の分散分析の結果，SS，SA 尺度得点も他のタイプよりも有意に高く，全尺度で高得点を示したタイプといえる。個我の形成に重きを置き，集団的自我への希求度は低く，明確な自己の存在感覚と自己に対する肯定感も高い。

② 「危機」タイプ

SO 尺度得点は高いが，SB 尺度得点は低い者。個我の形成に重きを置きつつも，集団的自我への所属も求めているタイプだが，SS，SA 尺度得点が達成タイプに比べて有意に低く，自己感覚や自己肯定感の低さから，個我の形成と集団的自我への所属を望む欲求との間の葛藤が高く，自己像の混乱も激しいと想像される。

③ 「回避」タイプ

SO 尺度得点は低いが，SB 尺度得点は高い者。個我の確立感は乏しいが，集団的自我への希求度は低いタイプで，SS 尺度得点は危機タイプと同様，達成タイプより有意に低いが，SA 尺度は危機タイプよりも有意に高い。自己感覚は高くないが自己肯定感はさほど低くなく，危機タイプに比べれば，自己像はあいまいながらも一応の安定は得ていそうである。石谷（1987）は男子大学生の自我同一性と対人関係を調査した研究のなかで，自分自身の問題にも，他者との関係にも深く関与することを避け，あいまいな状況を保つことで自己を保っているタイプを見出だし，「回避型モラトリアム」と名付けたが，それと似たメカニズムがここでも推測できる。

④ 「埋没」タイプ

SO，SB 尺度得点がともに低い者。個我の未確立なまま集団的自我への埋没を希求しているタイプ。SS 尺度得点が他のタイプよりも有意に低く，自我拡散に対する防衛としての意味が強いが，SA 尺度得点も達成や回避タイプに比べ有意に低く，このような自我の在り方に，あまり肯定感は抱いていないことにも注意する必要がある。

危機，埋没の 2 タイプは，仮説(1)の②，③の特徴を示しており，仮説(2)は部分的に支持されたといえる。しかし仮説(1)—④に対応するタイプは見出だせず，代わりに回避タイプが現われた。また達成タイプも仮説(1)—①のような自我形成の道を歩んでいるかどうかはさらに検討が必要と思われる。

表4　同一性の4タイプ

タイプ	G1	G2	G3	計	X^2検定の結果
達　成	35	19	25	79	G1＜G2＋G3　X^2=7.282　P＜.01 G1＋G2＜G3　X^2=5.932　P＜.05
危　機	23	6	6	35	N. S.
回　避	44	18	14	76	N. S.
埋　没	47	12	13	72	N. S.
計	149	55	58	262	

次に各タイプの人数分布を年齢群ごとに示したものを表4に示す。達成タイプが，G3に多くG1に少なかった他は有意な差は見られなかった。個我の確立を軸とした同一性形成が，青年期後期から成人期にかけて進行するものと解することもできる。一方他のタイプに，年齢群間での人数分布の偏りは見られず，これらを同一性形成途上の一過程としてとらえることは難しいと思われる。

(4)　同一性の4タイプでのT.ATの結果の比較

TATの結果は年齢群間での差が大きく，青年期後期や成人期の一般的特徴を表していると考えられたが，ここではタイプの特徴を表しているものにしぼって述べる。年齢群間での差が大きかったので，各年齢群でそれぞれタイプ間の結果を比較したが，G2，G3では標本数も少なかったので成人期として一つにまとめ，タイプ間の結果を比較した。

G1では，危機タイプが他のタイプと異なる結果を示した。まずカード2は，後景の農村風景と前景の若い女性とを合成した図版であり，若い女性を主人公にして，後景の社会や風土との葛藤がテーマとされることが多く，集団的自我との関連を見るのにふさわしい図版と考えた。後景との間に葛藤や軋轢を述べる者には，タイプ間で偏りはなかったが，葛藤や軋轢を，人間関係の不和として描く者と，生き方や価値観の違いとして描く者とに二分すると，後者に危機タイプが多かった（X^2=3.633　P＜.10)。また物語のテーマを異性との関係とする者に危機タイプが多かった（X^2=7.372　P＜.01)。

カード3は，「暗くて危機的な状況が圧倒的な強さで見るものに迫ってくる」(坪内　1984）とされる。そこでこの危機状況をどうとらえるかを見た。精神的苦悩を述べる者の大半は人間関係での苦悩だったが，危機タイプが他のタイプより多かった（X^2=4.995　P＜.01)。人間関係の内容はほとんどが異性関係で，関係の崩壊や危機を描いていた。このように危機タイプには，異性関係をテーマに取り上げるものが多いが，男女の関係を表したカード4では，男性に否定的な影響を及ぼす女性を描く者に，危機タイプが多かった（X^2=5.066　P＜.05)。危機タイプの結果は，異性との親密性への関心が他のタイプよりも強いことを示していると考えられるが，女性に翻弄される男性像などは，異性との関係のなかで個我を維持できない恐れを表しているとも考えられる。

次にG2とG3をあわせた成人期の結果を，G1と同じ基準でタイプ間で比較した。カード2では，テーマとして親子の関係や故郷との関係をあげる者に，達成タイプと埋没タイプが多く（X^2=

3.836 P＜.10)，中でも後景の親や故郷に対して，決別したり未練を残すという，後景と肯定的な関わりをもてない苦悩を表す者は，ほとんどが達成タイプと埋没タイプだった。このような苦悩は一種の根こぎ感と考えられるが，こうした危機状況をこの2タイプが見易いことは，両者の同一性がこの根こぎ感（それは自我拡散の危機でもある）と深い関連を持っているからではなかろうか。この危機に対して，達成タイプが個我の形成へ，埋没タイプは集団的自我への埋没へと進みやすいと思われる。

カード4では，怒りで我を忘れたり，身をもち崩している男性を女性が介護するという設定が，成人期を通して広く見られたが，女性が能動的に男性を援助するか，あるいは男性に対して受動的な地位にとどまるかではタイプ間に差があらわれた。前者には危機タイプと埋没タイプが多く（X^2＝3.105 P＜.10)，後者には回避タイプが多かった（X^2＝3.296 P＜.10)。また，男性が女性には明かせない秘密，女性は不可侵の世界を持っているという設定をする者には，達成タイプと回避タイプが多かった（X^2＝5.793 P＜.05)。回避タイプが親密な異性に対してもある距離をとり，深い関わりを避けようとしている点がうかがわれる。以上，断片的なものになっが，TATの結果をもとに各タイプの特徴を見た。青年期後期と成人期とでは，同じタイプであってもその臨床像や意味内容が相当異なることも予想されるが，TATの結果は，成人期のタイプについても，質問紙から得られた各タイプの臨床像に，ほぼ沿っていることを示唆しているように思われた。

V 考　　察

考察を進める前に，今回，集団的自我との関わりを測定する尺度として挙げたSB尺度について，検討しておきたい。この尺度は全て逆転項目からなっており，低得点は文字どおり集団的自我を希求しての，所属・埋没への態度と見なせたが，高得点の場合，そうした希求性や態度が乏しいことは意味しても，これよりすぐに集団的自我への所属・埋没に抗する態度を意味するのかどうかはまだ検討の余地が残されている。この点に留意して以下に考察を述べる。

(1) 個我の形成と集団的自我との関わりとの関連について

仮説(1)で挙げた4つの点が，同一性形成における日本的特徴として見出せるのではないかと予想したが，全般的な特徴としては，青年期後期の者で仮説(1)－③のみ支持された。これは鑪や杉原の考察を実証的に支持するものと言え，青年期の同一性形成過程において，集団的自我が自我拡散に対する防衛的機能を果たしていると考えられる。残る3つの点は，全般的な特徴としては見出せなかったが，操作的に抽出した4つのタイプの特徴として現われたものもあった。

(2) 同一性の4類型について

個我の形成度の高低と集団的自我への所属の希求度の高低により，操作的に4タイプを抽出し，達成・危機・回避・埋没の4タイプを得た。達成と危機の両タイプは，ともに個我の形成度は高いが，集団的自我への態度が対照的であり，自他の心理的境界の強さや自己についての肯定感では大きな違いが見られた。

危機タイプにおいて集団的自我への希求度が高いのは，それだけ自我が根こぎの状態にあることを示唆し，孤立感の高まりを想像させる。危機タイプの者は，一方で個我の形成に力を向けながらも，集団的自我への所属を求めて人間関係への志向性は極めて高いことがTATでも示された。またTATの結果は，こうした志向性が時として個我を脅かしかねない危険も胎んでいることを示している。すなわち接近と拒否との両価葛藤に陥り，自我が危機に瀕していると考えられる。同一性地位におけるモラトリアムも自我が危機状態にあるが，その危機内容は自分を賭るものを模索することであり，危機の内容という点で大きな違いがあると思われる。

一歩達成タイプは，集団的自我への所属を拒んで孤独な自我形成の道を歩んでいると解するのではなく，集団的自我との関係が今更意識に昇ることもないほど集団的自我に支えられ，それを基盤に個我の形成に力を注いでいるとも解することができるかもしれない。達成タイプは同一性地位における達成地位に対応すると考えられるが，このタイプにおける個我の形成と集団的自我との関連はさらに詳しく検討する必要がある。

埋没タイプと回避タイプはともに個我の形成度は低いが，埋没タイプは集団的自我への希求が顕著で自我拡散に対する防衛として集団的自我を求めている解することができるが，回避タイプはまた異なった防衛の方略を使っていると思われる。それは回避による防衛で，全く引きこもってしまうわけではないが，自己への関与も他者への関与も浅く留めることで，自己が露呈する機会を避け続けることである。これは北村（1983）の挙げた「柔軟なF」の臨床像や小此木（1980）の「シゾイド人間」の記述と共通点が多く，現代の社会的背景とも密接に関連したものとも考えられる。

(3) 反省と今後の展望

同一性形成過程で，本研究では集団的自我と呼んだ，集合的で多分に無意識的な文化的同一性との様々な関わり方が見られたが，まだ未解明な部分が非常に多い。そのためには集団的自我と呼んだものそのもの（そのネイミングの是非も含めて）を究明する姿勢が不可欠と考える。今回は個我の形成と集団的自我とを言わば対置させたが，こうした観点そのものが集団的自我のもつ豊かな意味合いを損ねてしまう恐れもあろう。濱野（1985）はこの点に関し，「日本人にとってはアイデンティティを自らの身体の内にあるいは無意識の中に再認していくといえるのではないか」と述べているが，日本における同一性形成過程の究明には，既にそこにあるものを再発見するといったプロセスが重要な一側面になるのではないだろうか。

引用文献

千原雅代（1988）：青年期後期から成人期にかけての女性の自我同一性に関する研究　京都大学大学院教育学研究科修士論文

Dignan, M.H.（1965）：Ego Identity and Maternal Identification. *Journal of Personality and Social Psychology vol 1* 476－483

Erikson, E.H.（1950）.：*Child and Society.* NewYork, Norton　（仁科弥生訳「幼児期と社会」みすず書房）

Erikson, E.H.（1959）：*Identity and the Life Cycle.* Psychological Issues 1 Monograph 1. International Universities Press

濱野清志（1985）：アイデンティティ試論　京都大学学生懇話室紀要
石谷真一（1987）：男子大学生の自我の確立と親密性　京都大学教育学部卒業論文
河合隼雄（1976）：「母性社会日本の病理」中公叢書
河合隼雄（1978）：「新しい教育と文化の探求」創元社
河合隼雄（1983）：概説「岩波講座・精神の科学６」ライフサイクル　岩波書店
木村　敏（1972）：「人と人との間」弘文堂
木村法子（1983）：対人恐怖についての一考察　京都大学教育学部紀要　29，134－144
北村英哉（1983）：現代日本における自我同一性形成の特質　東京大学教育学部心理教育相談室紀要第６集　29，143－151
Marcia, J.E.（1966）：Developmen and Validation of Ego-identity status. *Journal of Personality and Social psychology vol 3* 551－558.
森　裕子（1989）：文化に固有な自我同一性概念と自我同一性葛藤　――日米比較研――　日本心理学会第53回大会発表論文集　167
無藤清子（1979）：「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性　教育心理学研究　第27巻　第３号　178－186
岡本裕子，山本多喜司（1985A）：定年退職期の自我同一性に関する研究　教育心理学研究　第33巻　第３号　185－194
岡本裕子（1985B）：中年期の自我同一性に関する研究　教育心理学研究　第33巻　第４号　295－306
岡本裕子（1986）：成人期における自我同一性ステイタスの発達経路の分析　教育心理学研究　第34巻　第４号　352－358
小此木啓吾（1980）：「シゾイド人間」朝日新聞社
杉原保史（1985）：自我同一性地位における早期完了型についての個性記述的研究　京都大学教育学研究科修士論文
高橋裕行（1984）：自我同一性と Marcia の同一性地位面接　批評的展望　教育心理学研究　第32巻　第４号　320－328
鑪幹八郎（1974）：自我同一性の危機の様態に関する臨床心理学的考察　広島大学教育学部紀要　第一部　23　329－342
鑪幹八郎（1977）：自我同一性の根としての自律性に関する一考察　広島大学教育学部紀要　第一部　26　317－325
山本　力，名島潤慈（1984）：日本における同一性研究の歴史と展望（鑪ら編著「自我同一性研究の展望」ナカニシヤ出版）

（博士後期課程）